論説/Opinion

学術領域の架橋可能性について

森山 工*

On the Possibility of Bridging Academic Fields

Takumi MORIYAMA*

Abstract– This article explores different manners of distinguishing diverse academic fields, which comprise natural sciences, technology, humanities and social sciences. It is true that the division of literary fields and scientific fields is most mentioned in this area of discussion: the article refers, however, to the possibility of other divisions of vast academic fields, that tantamount to relativize the division of literary and scientific fields and to traverse those two. The article tries to find out ways to bridge various divisions of academic fields from this perspective.

Keywords– divisions of academic fields, literary fields and scientific fields, academic capitalism, model of reality, model for reality, explanation, interpretation, hypothesis, abduction, bridging academic fields

1. はじめに

わたしは，横断型基幹科学技術研究団体連合（以下，横幹連合という）の第14回コンファレンスにおいて,「東京大学における領域融合の試みと UTokyo Compass」と題して特別講演をおこなう機会を与えていただいた.

コンファレンスのテーマは「対立・矛盾を克服する横幹知イノベーション：領域融合のトランスフォーメーションを目指して」である．わたしの講演も，科学技術（人文学・社会科学分野を含めた）における「対立・矛盾」のあり方を概観するとともに，そうした「対立・矛盾」を「克服する」方向性について考察するものとなった．本稿では，その際にわたしが提起した議論を改めてお示ししたい[1].

2. 文理の区分

横幹連合のホームページを見ると，その「設立趣旨」のページに次のように記されている.

> 横幹連合は，文理にまたがる43（設立時）の学会が，自然科学とならぶ技術の基礎である「基幹科学」の発展と振興をめざして大同団結したも ので，限りなくタテに細分化されつつある科学技術の現実の姿に対して,「横」の軸の重要性を訴えそれを強化するためのさまざまな活動を行う[2].

また,「横断型基幹科学技術」に関する「定義」の項目には次のようにある.

> 横断型基幹科学技術とは，論理を規範原理とし，自然科学，人文・社会科学，工学などを横断的に統合することを通して異分野の融合を促し，それにより新しい社会的価

*東京大学　東京都文京区本郷 7–3–1

*The University of Tokyo, 7–3–1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo

Received: 31 January 2024.

1. 以下の本稿で示す考察は，2020 年 12 月 25 日付けで東京大学人文社会科学振興ワーキング・グループが示したその「最終報告書」（「東京大学における人文社会科学の振興とその展望」）で提起した考察と密接に連関している [1].
2. https://www.trafst.jp/about_us/aimes/（2024 年 1 月 26 日閲覧）

値の創出をもたらす基盤学術体系である[3].

したがって横幹連合とは,「文理にまたがる」学会が構成し,「自然科学，人文・社会科学，工学など」の横断的な統合を図る学術機関であることになる.

ここに前提となる発端として措定されているのは,「文理」という区分ではないだろうか.「文理」をまたぎ,「文理」を横断的に統合するものとして横幹連合は構想され，設立されているのではないだろうか[4].「文理」を「対立・矛盾」において捉えるということ，これは日本の中等教育から高等教育までをカバーする常套的な学術領域の区分である.

学術領域の区分は，おおむね 18 世紀から 19 世紀にかけての西欧において成立したものと考えることができるが，そこにおいても「文理」の区分は重要な意義をもつものであった．このことは，19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて活躍したドイツの哲学者ハインリヒ・リッケルトの考察に見ることができる．リッケルトは，1898 年初出の論考において,「文化科学」を「自然科学」との対立において構想し，定式化しようとした [2]．リッケルトはそこで,「文化」を「意味」と関連づけるとともに,「自然」を「意味を離れたもの」として把握している．その論点の中心は「価値」の概念にあり,「文化」においては「価値」を充当された現実が,「自然」においては「価値」を離れた現実が，それぞれ対応する．リッケルトにとって「文化」という概念は,「一般に承認された価値（又は価値によって組織された意味形象）の附著せる，且つこれらの価値を目あてに養護される実在的諸客体」[5]なのである.

このような立場から「文化科学」と「自然科学」との区分について考察するとき,「自然科学」とは,法則性を探究する一般化的な志向性をもった学術探究であることになるであろう．その一方で「文化科学」のほうは，特定の事象なり事象群なりを独自の個性を有したものとして捉え，その個性の理解に向かう個性化的な志向性をもった学術探究であるということになるであろう.「一つしかない実在的客体の特殊性と個性」[6]を把握することは,「自然科学」にはなしえない．それというのも,「現実的なものを我々は特殊的個性的なものに於て有するのであって，それは決して普遍的要素からは構成され得ない」[7]からである.

このように「文理」の区分（現在の観点からそのように位置づけられるもの）については，早くから考察がおこなわれている．しかしながら，STEM といわれる「理学・技術・工学・数理」（Science, Technology, Engineering, and Mathematics）と「人文学・社会科学」（Humanities and Social Sciences）とを制度的な対比において捉えるようになったのは，20 世紀後半のことであるといわれる [3]．この点では，1959 年の講演で，イギリスの物理学者チャールズ･P･スノーが提示した議論がよく知られている [4]．スノーはそこで，教育研究において「自然科学」と「人文科学」という二つの「カルチャー」が相互不信をいだき，コミュニケーション不全を起こしているという議論を提起したのだった.

したがって,「文理」の区分には根強いものがあり，横幹連合が「文理にまたがる」ことを設立趣旨の一環としているのには，それが「横断型」である以上，説得的なものがあるといえる．しかしながら私見によれば，学術領域の区分は「文理」の区分や，そのそれぞれにおいて成立している学術ディシプリンの区分にかぎられるものではない．以下では，そのような観点から学術領域の区分について考察してみたい．そこでのポイントは,「文理」の区分を横断するような，まさしく「文理にまたがる」学術領域の区分が多様にありうるということである.

3. アカデミック・キャピタリズムとの距離による区分

第 1 に，いわゆる「アカデミック・キャピタリズム」との距離によって学術領域を区分する仕方がある.「アカデミック・キャピタリズム」に近いところに位置づけられるか，逆にそれからは遠いところに位置づけられるかという観点からの区分である.

3. ibid.
4. 「定義」に挙げられた「自然科学，人文・社会科学，工学など」の「工学」については，別の考察が必要である.「自然科学」と「工学」とを別箇に挙げることにおいて,「科学」と「技術」との区分が想定されているように思われるからである.
5. 文献 [2]，p. 62. ただし，字体ならびに仮名遣いを新字体・新仮名遣いに変更している（以下，同書からの引用については同じ）.
6. 文献 [2]，p. 85.
7. ibid.

「アカデミック・キャピタリズム」とは，学術的な活動とその成果を一種の「資本」として捉え，市場原理とのかかわりで，それが市場化に適合的であるのか否かを問題とする理論である[8]．この意味で市場化に適合的である学術は，近年の学術動向や学術政策における用語法によるならば,「イノベーション」に直結するものとして捉えることができるであろう．

だが留意しなければならないのは，このような「アカデミック・キャピタリズム」との距離の遠近は,「文理」の区分を横断しているということである.「文」のなかにもそれとの距離が近いものがある一方で遠いものがあると同時に,「理」のなかにも遠近がある．一般的な思いなしからいえば,「文」すなわち「アカデミック・キャピタリズム」から遠いもの,「理」すなわち「アカデミック・キャピタリズム」に近いものと捉える傾向があることは否めない．確かに,「文」の一翼をなす人文学は総じて「アカデミック・キャピタリズム」からは遠いところに位置している．しかし,「文」のなかでも社会科学の学術領域（法学・政治学や経済学など）はこれと近しい関係をもっている．逆に「理」のなかでも基礎科学のように，容易には「アカデミック・キャピタリズム」と適合しない学術領域も存在する．

また，通常は1つの分野に括られうる学術領域であっても，たとえば経済学よりも経営学や会計学のほうが「アカデミック・キャピタリズム」により適合的であるなど，それとの関係には遠近が生じうる．近年の日本の学術動向においては,「イノベーション」において人文学・社会科学が積極的な役割を果たすことが期待され，それが一種の「社会的要請」として文部科学省などから提起されている．このような学術をめぐる動向は，まさしく「アカデミック・キャピタリズム」との適合性によって意味づけを図られるべきであろう．場合によっては，学術振興策がそれと適合性の高い分野に集中することで，本来は重要なはずの研究分野が発展しなくなる危険も生じうると危惧される．同様の問題は「理」における基礎科学の学術領域にも起こりうるはずである．

8. 「アカデミック・キャピタリズム」と大学における教育研究とのかかわりを論じたものとして，文献 [5] を参照されたい．

4. 学術活動が目指すものによる区分

第2に，学術活動の目標とするところによって学術領域を区分することが可能である．端的にいえば，それは現実の探究を目標とするのか，あるいは価値や規範の探究を目標とするのかによる区分である．現実の探究を目指すのであれば，学術活動は経験的・実証的な現実のあり方の把捉に向かうことになるであろう．他方で価値や規範の探究を目指すのであれば，現実を生みだす規範となるような価値の把捉に向かうことになるであろう．

このことは，学術活動が何らかの「モデル」（「現実」を抽象化して構成されたもの）をつくりだすことであると考え，その「モデル」と「現実」との関係性によって学術活動が目指すところを区分すると分かりやすい．経験的・実証的な現実の探究は,「現実のモデル」を構築することになぞらえることができる．他方で，規範的な価値の探究は「現実へのモデル」を構築することになぞらえることができる[9]．

文化人類学者がフィールドワークで，ある地域を調査する場合を考えてみよう．その地域で文化人類学者は，ある特徴的な家屋の形態に眼を止めたとする.「現実のモデル」（model of reality）というのは，そこで文化人類学者が眼にした特徴的な家屋群について，すなわち現に存在する家屋群について，その図面（たとえば平面図と立面図）を引くことに対応する．現に存在するさまざまな家屋（「現実」）について，それを抽象化して示す図面（「モデル」）を引くことに対応する．これは「現実のモデル」として,「現実反映的」なモデルである．

これに対して，開発学者や国際協力の専門家がフィールドワークをおこない，ある地域を調査する場合を考えてみよう．調査の結果，その開発学者なり国際協力の専門家なりは，この地域の開発に資するような家屋形態の着想を得たとする.「現実へのモデル」（model for reality）というのは，その着想を図面（たとえば平面図と立面図）に引き，その図面に沿って実際の家屋を建築することに対応している．抽象化された図面（「モデル」）につ

9. ここで「現実のモデル」（model of reality）といい,「現実へのモデル」（model for reality）というのは，アメリカ合衆国の文化人類学者クリフォード・ギアーツの論考 [6] に着想を得たものである．

いて，それを実際の家屋（「現実」）として実現することに対応している．これは「現実へのモデル」として,「現実生成的な」モデルであるといえる．

両者の根本的な差異は,「現実」と「モデル」とのあいだに不一致や不整合が生じた場合を考えれば明らかであろう．文化人類学者がフィールドで観察した「現実」（現に存在する家屋）と，その観察にもとづいて構築した「モデル」（家屋の図面）とのあいだに不一致や不整合があった場合を考えてみよう．この場合に間違っているのは明らかに「モデル」である.「現実」には柱が 4 本あるのに,「モデル」には柱が 3 本しか描かれていないというように．だから，調査をし直して,「モデル」（図面）を引き直さなければならなくなるわけである．

これに対して，開発学者や国際協力の専門家が着想した図面，すなわち「モデル」と，現に建設された家屋，すなわち「現実」とのあいだに不一致や不整合があった場合はどうであろうか．このときに間違っているのは「現実」のほうである.「モデル」には柱が 3 本しかないのに，実現された「現実」には柱が 4 本もあるというように．だから，家屋を建て直して,「モデル」に合致するように「現実」をつくり直さなくてはならなくなるわけである．

このように，学術活動を「現実」と「モデル」との関係性によって把握する場合，一方には「現実」を「記述分析」する「モデル」（「現実のモデル」）の立て方があり，他方には「現実」を「設計生成」する「モデル」（「現実へのモデル」）の立て方があることになる．重要なのは,「現実のモデル」として構成されたモデルが，今度は「現実へのモデル」として作用する場合があることであり，逆もまた然りである．後にも述べるように，このような「現実のモデル」と「現実へのモデル」とのあいだの相互往還的な影響関係のあり方は，現実に対するモデルの作用が相互に逆向きの方向性をもった循環的なかたちで現象化することを意味している．学術は，このような複雑な循環運動のどこかに位置づけることができるのであり,「文理」の区分に沿って,「文」であるからこのニッチを占め,「理」であるからこのニッチを占めるなどと単純化して一般化することはできない.「文」と「理」の双方において，多様な学術領域は，この循環運動のどこかにニッチをもつはずだからである．

たとえば「文」においては，個人や集団のふるまいを経験的・実証的に記述分析してそれをモデル化する志向性をもった学術領域がある一方で，個人や集団がもつべき望ましい倫理的な規範をモデル化し，それによって現実に変革を促し，現実を設計生成する志向性をもった学術領域がある.「理」においても，地球上の，あるいは宇宙におけるさまざまな物質のふるまいを経験的・実証的に記述分析してそれをモデル化する志向性をもった学術領域がある一方で，何らかの規範的な価値の観点から望ましいモデルを構築し，それを実現することによって，現実を設計生成しようとする（すなわち「イノベーション」をもたらそうとする）志向性をもった学術領域がある.「現実」に対して「記述分析」的な志向性をもつか，あるいは「設計生成」的な志向性をもつかは,「文理」の区分を横断するものなのである．

5. 学術活動の手法による区分

第 3 に，学術活動の手法によって学術分野を区分することも可能である.「手法」ということばでわたしが想定しているのは,「説明」を手法とするのか,「解釈」を手法とするのかという点である．

一方には，事象間の因果関係を把握し，それによって事象を「説明」しようとする学術領域がある．他方には，事象間が相互に意味づけられるあり方を把握し，それによって事象を「解釈」しようとする学術分野がある.「説明」とは機能連関の把握であり,「解釈」とは意味連関の把握にほかならない．

両者の重要な違いは,「説明」が事象を客観化して対象化し，それゆえに説明者は説明される対象に対して超越的かつ中立的な位置に身を置くのに対して,「解釈」が必然的に解釈者を解釈される対象に意味論的に巻き込み，それによって解釈者と解釈される対象とが 1 つの意味論的な系をかたちづくることである.「文」であれば,「解釈」が必然的にはらむこの問題は，文化人類学のフィールドワークや社会学の質的調査法に抜き差しならぬかたちでつきまとっている．

これを比喩的にいうならば，学術活動の手法が何ごとかの対象を測りとるものであると考えるのが分かりやすいであろう.「説明」のほうは，対象の長さを測りとるために，巻き尺や定規をそれにあてがうことに類比的である．これに対して「解釈」のほうは，対象の温度を測りとるために，温度計を対象物に差し入れることに類比的である．前者の場合，測りとる行為は対象物に巻き尺や定規をあてがうだけで，対象物そのものを乱すことがない．これに対して後者のほうは，温度計の目盛りを上昇させるために，対象物からいくばくかの温度を奪っている．別言すれば,「解釈」において解釈者は解釈される対象を乱すのである.

文化人類学者がフィールドワークに赴き，人口300人の村の生活に参与するとき，当該の文化人類学者は村落住民に対して超越的かつ中立的な位置に身を置くことができるであろうか．むしろ文化人類学者の存在は，村落生活に何らかの影響を与えるのではないだろうか．その結果，文化人類学者は人口300人の村を超越的かつ中立的な位置から観察することはできず，いうなれば人口301人となった（ならざるをえなかった）村を観察することになるのではないだろうか.

すなわち「解釈」においては，解釈者を対象から切断して特権的に客観的な位置をあてがうことができず，解釈者と対象とが相互に作用をおよぼしあい，1つの系をなすことになるのである．したがって，意味連関を解明する「解釈」においては，このように解釈者と対象とが1つの系をなすあり方それ自体をメタ解釈しなくてはならない．解釈者が何らかのテクスト（文学テクストでも，史料テクストでも，あるいは美術作品でもよい）と向きあい，そこから意味を抽出する場合にも，同じように解釈者と対象テクストを意味論的な関係において結ぶ系が成立する.「理」であれば，このように解釈者と対象とがある種の系をなし，したがって解釈者の位置どり自体をメタ解釈の対象としなくてはならないような現象は，量子論における観測者の問題に典型的に見ることができるであろう．したがって，こうした学術手法による区分も,「文理」という区分を横断するものなのである.

6. 仮説に対するスタンスによる区分

第4に，学術的な営為に不可欠の「仮説」に対するスタンスからも，学術領域を区分することができる．一方には，まずリサーチ・クエスチョンを定め，帰納法や演繹法にもとづいて仮説を立てた上で，その仮説を実証的に検証しようとする手法，すなわち「仮説検証」によって現実のあり方を把捉しようとする学術領域がある．その一方で，さまざまな経験的事象とその観察に依拠しつつも，それに関する調査や探索の成果として仮説を発想する手法，すなわち「仮説発想」によって過去・現在・未来の現実のあり方を把捉しようとする学術領域がある.

ここでいう「仮説発想」とは,「問題発見的な」（ヒューリスティックな）仮説生成である．論理過程としては，経験的な帰納法とも合理的な演繹法とも異なる第3の推論作法である「アブダクション」に依拠している[10].

アブダクションとは，個別の経験的事実を適切に説明する仮説を導きだす論理的推論である．経験的事実にかかわるという点では演繹と異なり，帰納と同じである．だが，帰納が限定された数の経験的事実からありうるかぎりの経験的事実を推測するという過程をたどって一般化を図るのに対し，アブダクションは経験的事実を説明づける何らかの仮説を発想するというかたちで推論をおこなう.

たとえば，1つのリンゴの果実が樹から落ちるのを目にしたとしてみよう．これが経験的事実である．だが，果実が樹から落ちる事実をいくら経験したとしても，つまり経験的事実をいかに多数集めたとしても，そこから帰納によって推測できるのは，たとえば，次にはあの果実も落下するだろうということでしかない．何らかの一般化を図るにしても，しかじかの程度の熟れ具合になったリンゴの果実は樹から落下するということくらいであろう.

ところがそこに,「重力」という発想を挿入したとしたらどうだろうか．ここには，決定的ともいえる「思考の跳躍」が作用している．なぜなら，落

10. 推論作法としてのアブダクションを最初に定式化したのはアメリカ合衆国の哲学者・論理学者のチャールズ・サンダーズ・パースである [7]．また，アブダクションについて詳説した日本語文献として，文献 [8] を挙げておく.

下する果実とは異なって，重力それ自体は見たり触ったりすることができないものだから，すなわちそれ自体は経験的事実として把捉することができないものだからである．しかしながら，その「思考の跳躍」によってこそ,「重力」という問題の発見が遂げられる．経験的な個別の事実に，それ自体としては経験から把握することのできないある仮説的な説明がつけられることになる.「思考の跳躍」によって，仮説の創造的かつ想像的な生成へと導かれるのである．

この「重力」の例からも分かるとおり，アブダクションとは感覚に訴えるさまざまな経験的事実を相互に関連づけ，その関連づけの深層（それ自体としては経験的に把捉することのできない深層）へと跳躍し，それによって深層にある仮説を発見的に捕捉することにほかならない．ニュートンにおける「重力」や，ダーウィンにおける「進化」や，フロイトにおける「無意識」や，レヴィ=ストロースにおける「構造」などなど，そこにおいては何らかの概念＝問題が発想され，いわば発見されるとともに，その概念＝問題に依拠することで，さまざまな経験的事実が新しい相（アスペクト）のもとに発見されることになるわけである．

仮説に対して「仮説検証」というスタンスをとれば，これを社会的課題に応用する場合には，検証がなされた仮説の「社会実装」と親和的であろう．これに対して「仮説発想」というスタンスをとれば，主眼が仮説の創造的かつ想像的な発想にあるがゆえに，それを社会的課題に応用する場合には，発想された仮説にもとづく「社会構想」と親和的であるということができよう．そして容易に理解されるように,「仮説検証」と「社会実装」という志向性と,「仮説発想」と「社会構想」という志向性とは,「文理」の区分を横断しつつ，学術の全領域にわたって認められることである．そればかりでなく，後に見るように,「仮説検証」をさまざまに試行する過程で「仮説発想」がなされたり,「仮説発想」によって見いだされた仮説が「仮説検証」へとフィードバックされたりと，両者は相互に連関しつつ全体としての研究が進展することがあるのである．

7. 学術領域の区分と架橋可能性

「文理」という区分を出発点として，以上のように学術領域のさまざまな区分について考察したわけであるが，これらの区分を架橋し，学術領域の融合を図るという可能性はどのように構想されるのであろうか．

1 つの方向性は，各学術領域の拡張による架橋の可能性である．たとえば文化人類学においては「応用人類学」（applied anthropology）という領域がある[11]．これは,「基礎研究」になぞらえられた文化人類学の知見や方法を実践的に「応用」しようとする学術領域であって，具体的には国際的な開発援助の枠組みと現場において，開発する側のより有効な働きかけのあり方を考えたり，開発される側の視点や理解のあり方を考えたり，両者の相互作用に着目しつつ，その望ましいあり方を考えたりすることに見てとられる．

文化人類学は，研究者（多くの場合，欧米や欧米系の学術が一定の進展を見ている「先進国」の研究者）が，みずからの文化とは異なる文化（多くの場合,「非先進国」の文化）を研究し，その理解を図る学術領域である．しかしながら，21 世紀への変わり目ごろから，この意味での「非先進国」において平和や人権が脅かされるさまざまな事象が顕在化するにつれて，文化人類学と，その応用領域としての応用人類学との境目はきわめてあいまいに，かつ流動的になっている．このため，かつて截然たるものとして想定されていた両者の区分はいわば架橋され，現状においては文化人類学という広域的な領域のなかに両者が統合されつつあるというのが実態となっている．

この場合,「文化人類学」が領域拡張をしたのか，それとも「応用人類学」が領域拡張を果たしたのかは一義的に規定しがたい．しかしながら，今現在においては「応用人類学」という学術領域自体が「文化人類学」に包摂されている，すなわち「文化人類学」自体が応用領域を包摂するようになっていると考えることが可能であろう．このことは,「アカデミック・キャピタリズム」をめぐる議論におい

11. 応用人類学については文献 [9] を参照されたい．また，フランス語文献ではあるが，この学術領域の古典として文献 [10] を挙げておきたい．

て，それからは遠いものとして想定されていた文化人類学と，それに近いものとして想定されていた応用人類学とが，いわば同一の学術領域として包摂されるようになっている事態として把握することができる．あるいは,「現実のモデル」（記述分析的なモデル）を構築することを主眼としていた文化人類学と,「現実へのモデル」（設計生成的なモデル）を構築しようとしていた応用人類学とが，同一の学術領域に包摂されている事態として把握することができる．このように，世界の各地に見られるさまざまな状況の変化に呼応することよって，学術領域が1つに包摂されるということに，学術領域の区分の架橋可能性というものがうかがわれる．逆に区分を架橋するという観点に立脚したときに，世界の諸状況がそれまでとは異なる様態のもとに姿をあらわすということも考えられるであろう．

その一方で，前述したような学術領域の区分は，大局的に見れば，それ自体がある種の循環のなかにあると考えることもできる．

たとえば,「現実のモデル」と「現実へのモデル」として述べたことを考えてみよう．学術領域の立場から見れば,「現実のモデル」の構築に専心する学術領域もあれば，逆に「現実へのモデル」の構築に専心する学術領域もあるであろう．しかしながら，それらを俯瞰してみれば，現実をモデル化して考察すること（「現実のモデル」化）に依拠して，より望ましいモデルをつくり，そのモデルを現実へとフィードバックさせること（「現実へのモデル」化）があるわけであるし，モデルがフィードバックされた現実をさらにモデル化することもあるわけである．極言すれば，これは「現実」と「モデル」とが往還しあう循環的な事態であって，その循環のなかにおいてこそ,「現実のモデル」づくりをおこなう学術領域と「現実へのモデル」づくりをおこなう学術領域とが架橋されうることになるのである．

同じことは,「説明」（機能連関の解明）と「解釈」（意味連関の解明）とについてもいえるのではないだろうか．説明されたものが現代社会にとって，あるいは人類にとって，いかなる科学的・技術的・倫理的な意味を有するのかという考察に踏み込んだ途端に，それは解釈の領域に足を踏み入れることになる．また，解釈されたものが相互にどのような影響関係（いわゆる間テクスト的な影響関係のように）にあるのかを探究しようとした途端に，それは説明の領域に足を踏み入れることになる．ここにも,「説明」を主軸とする学術領域と「解釈」を主軸とする学術領域との往還が成り立つのであり，その循環的な相互関係のなかにおいて，両者は架橋されうるのである．

最後に「仮説検証」と「仮説発想」との関係についても同じ事態を想定することができる．検証すべき仮説を措定するためには，そもそもその仮説を発想するプロセスがなければならないであろう．アブダクションによって仮説を発想したとしたならば，その仮説を検証するプロセスがなければならないであろう．このように見れば，学術的な探究というものは,「仮説検証」と「仮説発想」とが無限のループを描きながら進展・深化してゆくということが感得される．このようなループを描くことにおいて，複数の学術領域が架橋される可能性が開かれるのである．

以上の学術領域の区分が「文理」の区分を横断していたことに，ここで改めて注意を促したい．これらの区分が「文理」の区分を横断していたことに鑑みるなら，これらが拡大包摂の関係にあるとか，相互循環の関係にあるとかということは,「文理」の区分そのものが拡大包摂の関係に立ったり，相互循環の関係に立ったりしうるということを意味している．ここに「文理」の区分の架橋可能性が開示されるのである．

8. おわりに

さまざまな学術領域が拡大包摂の関係や相互循環の関係に位置づけられるということは，個々別々の学術領域のみに目を止めるのでなく，拡大包摂・相互循環に依拠した架橋可能性の全体を把捉する必要があるということである．この全体のなかにおいてこそ，個別の学術領域は位置づけを得るということである．そのような架橋可能性の全体を構想することにおいてこそ，横断的な領域融合というものは成立するのではないだろうか．

ここで最後に，わたしが所属する東京大学にお

ける領域融合の方向性について触れておきたい．

東京大学は現在の藤井輝夫総長のもとで，2021 年 9 月 30 日に『UTokyo Compass ―多様性の海へ：対話が創造する未来』を制定した [11]．これは東京大学の目指すべき理念や方向性をめぐる基本方針を示した文書である．そこでは,「知をきわめる」「人をはぐくむ」「場をつくる」を 3 つの視点（Perspective）としつつ，人文学・社会科学と自然科学との文理協働を振興することが述べられている．その際には，多様な構成要素の尊重と，それらのあいだの対話を重視するということが示されている．

ここで問うべきなのは，そもそも「対話」とは何かということである．それというのも,「対話」というのは「議論」とは質的に異なるものとして想定されるからである．

「議論」においては，一方が他方を説得しようとし，その結果として一方は不変で他方が可変であるという状況が生まれうる．双方ともに不変，つまり不動であれば，それはそもそも「議論」にすらならないであろう．

これに対して「対話」とは，双方がともに可変であり，相互作用のなかで双方ともが現に変化する場のことではないだろうか．それはまさしく「弁証法」（dialectic）のプロセスであり，それこそが「対話」（dialogue）を成り立たせるものであるように思われる．そのように，相互を「止揚」しあいつつ，より高次元へと探究を高めてゆくことにこそ「対話」の意義があるものと考えられる．先に述べたように，拡大包摂・相互循環に依拠した架橋可能性の全体においてこそ，個別の学術領域が位置づけを得るのであるとするならば，したがって個別の学術領域が架橋可能性という「全体」の部分であるとするならば,「対話」を可能とし，かつ必然とするものは，学術領域のさまざまな区分と見えるものにすでに内在しているのである．

参考文献

[1] 東京大学，東京大学における人文社会科学の振興とその展望，https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400154605.pdf（2024 年 1 月 26 日閲覧）

[2] リッケルト，文化科学と自然科学，佐竹哲雄・豊川昇訳，岩波文庫，1939.

[3] 隠岐さや香，文系と理系はなぜ分かれたのか，星海社新書，2018.

[4] チャールズ・P・スノー，二つの文化と科学革命（新装版），松井巻之助訳，みすず書房，2021.

[5] S. スローター，G. ローズ，アカデミック・キャピタリズムとニュー・エコノミー―市場，国家，高等教育，成定薫監訳，法政大学出版局，2012.

[6] Clifford Geertz, Religion as a Cultural System, in Clifford Geertz, Interpretation of Cultures, New York: Basic Books, pp. 87-125, 1973.

[7] C. S. Peirce, Guessing, The Hound and Horn, 2(3), pp. 267-285, 1929.

[8] 米盛裕二，アブダクション―仮説と発見の論理，勁草書房，2007.

[9] Satish Kedia, J. van Willigen, Applied Anthropology: Domains of Application, Westport, Conn: Praeger, 2005.

[10] Roger Bastide, Anthropologie appliquée, Paris: Payot, 1971.

[11] 東京大学，UTokyo Compass ―多様性の海へ:対話が創造する未来，https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400170657.pdf（日本語版，2024 年 1 月 26 日閲覧），https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400170711.pdf（英語版，2024 年 1 月 26 日閲覧）

森山 工

東京大学理事・副学長．博士（学術）．専門は文化人類学．広島市立大学国際学部助教授，東京大学大学院総合文化研究科准教授，同教授等を経て 2024 年 4 月より現職．この間東京大学において，総長補佐，副学長，執行役・副学長，大学総合教育研究センター長，総合文化研究科長・教養学部長等を務める．